

大規模校における学年経営の在り方 ～RVPDCAによる生徒指導問題の未然防止～

大友 啓之 (i21049)

1. はじめに

近年、教員の新規採用者数が増加し、育成の充実が重要課題となっている。所属校においても、経験年数が5年以下の教員が多く存在し、中堅教諭やベテラン教諭との関わりの中で、教師としての資質・能力を伸ばしながら、真摯に児童の教育に従事している。一方で、教員の多忙化が大きく問題視されるようになり、所属校もまた、学級経営や教員同士の学び合いの充実のための時間を、十分に確保できていない状況である。加えて、所属校は児童数1100名を超える過大規模校であり、それゆえの生徒指導案件の数の多さは、教職員に大きな負担感・多忙感を与えており、教材研究や校内研修等に充てる時間の確保が難しいといえる。こうした状況について、管理職のリーダーシップにより根本的な解決が模索されているが、教員一人一人が、現状を打開する意識を持つことこそが重要であると考え。

以上のことから、所属校において、生徒指導上の課題解決に取り組むことは、児童の成長と教員の指導力向上を生み出すものであると考え、本テーマを設定した。

2. 研究の目的

生徒指導問題の未然防止を可能にする、大規模校における学年経営の在り方を、児童理解と教員の協働の充実を通して明らかにする。

3. 研究方法

生徒指導上の課題を解決する上で重要なことは、問題の早期発見・即時対応と、発生の未然防止であると考え。それにより、児童は安全・安心に学校生活を送る中で、自身の成長に邁進できると考える。また、教員は、生徒指導対応に割かれる時間や労力を軽減することができ、児童への指導・支援、自己の研鑽等に時間を充てることができると考える。そこで、1年次は文献調査等を、2年次は所属校における実践等を中心として、以下の手順で、生徒指導上の課題の未然防止を可能に

する学年経営の在り方を明らかにすることを試みた。

- (1) 生徒指導に関する理論的考察
- (2) 生徒指導上の課題を未然防止する手立ての検討
- (3) 手立ての実践、効果の測定と検証

4. 研究成果

(1) 生徒指導に関する理論的考察

1) 自己指導能力の育成

令和4年12月に『生徒指導提要』¹⁾が改訂された。提要において、生徒指導とは、児童生徒の個性を尊重し、そのよさや可能性の伸長と社会的資質や能力の発達を支援する教育活動であることや、生徒指導が、児童生徒の社会における自己実現の達成を支えることを目的としていることが示されている。同時に、生徒指導の目的を達成する上で、児童生徒一人一人が自己指導能力を身に付けることが重要であると明示している。自己指導能力とは、「児童生徒が、深い自己理解に基づき、『何をしたいのか』、『何をすべきか』、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する」力のことであり、その獲得を支える生徒指導を実践する上での視点として、「自己存在感の感受」、「共感的な人間関係を育成」、「自己決定の場の提供」、「安全・安心な風土の醸成」に留意することが求められている。

こうした自己指導能力は、サーバントリーダーシップに通底するものであると捉えることができる²⁾。サーバントリーダーシップは、対象者の自主的な行動を支援し、対象者や自身の内発的動機付けを喚起するものである。そのため、教師の姿勢として、また、児童生徒の自己指導能力の育成として、サーバントリーダーシップに立った活動は有効であると言える。

2) 生徒指導マネジメントサイクルの確立

生徒指導提要では、生徒指導を切れ目なく効果的に実践するためには、学校評価を含む生徒指導マネジメ

ントサイクルを確立する必要があることも示されている。これは、「生徒指導提要の改訂に関する協力者会議（第3回 令和3年8月25日）」における「生徒指導のRVPDCAサイクル」と同義であると言える。RVPDCAサイクルとは、児童の実態や保護者の思い等を調査(R)し、対象となる児童の目標や理想の姿(ビジョン V)を想定し、手立てや評価をサイクルさせるものである。

この「調査(R)」と「ビジョン(V)」を、年間を通して適宜行うことで、生徒指導上の課題の把握や即時的な対応や発生の未然防止を可能にできると考える。同時に、児童の成長を段階的に捉え、その状況に即した有効な手立てを構築できるとも考えられる。加えて、前述のサーバントリーダーシップは、マネジメントとしての考え方でもあり、RVPDCAサイクル(生徒指導マネジメントサイクル)においてサーバントリーダーシップを意識することで、自己指導能力の育成をより充実させることが期待できる。

3) 生徒指導上の課題の捉え方

生徒指導提要では、生徒指導を時間軸や課題性を基に、2軸3類4層の重層的支援構造とし、課題の把握や対応の判断を明示している。その中で、課題性の高い事案に対する即応的・継続的な生徒指導、児童生徒の自己指導能力の育成や課題発生の未然防止につながる指導・支援を行ったりする常態的・先行的な生徒指導と大別している。また、それらが好循環すること、特に常態的・先行的な生徒指導の創意工夫が充実することが期待されている。

(2) 生徒指導上の課題を未然防止する手立ての検討

児童生徒自身が、よりよく自己指導能力を習得し、向上させ、その力を発揮するための基本として、所属する学級・学年の風土が安定したものであることが求められる。生徒指導問題の未然防止には、その安定した環境を生み出す効果が大いに期待できる。常態的・先行的な生徒指導が重要視される理由はそこにあると言える。

そこで、より効果的な指導・支援の手立てを構築するために、生徒指導上特に課題のある児童について、児童の実態把握とカウンセリングマインドを踏まえたアセスメントを行うこととした。また、学年の児童全体を、学年担当教員全員で指導・支援していく体制を作るために、教科担任制や同教科における担任を交換した授業実践

等を行うこととした。

(3) 手立ての実践、効果の測定と検証

1) 手立ての実践

① 児童の実態把握とアセスメント

年間を通したRVPDCAサイクルの運用を意識し、年度初めに、調査(R)として、担任する児童についての引継資料と共に、いじめ実態調査の結果や少人数担当教諭からの聞き取り内容等も参考とした。それによって、特に生徒指導上の課題性が高いと思われる児童を抽出することができ、その児童の保護者とは、始業後1週間以内に電話連絡等でコミュニケーションをとった。その結果、指導上参考となる、引継資料からは知り得なかった情報を得ることができたり、前年度より前の状況を確認できたりした。得られた情報を基に、対象となった児童についての目標や指導方針等(V)を設定し、保護者と共有することもできた。さらに、児童だけではなく、保護者の状況を考慮し、保護者にスクールカウンセラーを紹介し子育てや子供の特徴についての悩みを相談する機会を設けることができた。それにより、保護者からの理解や信頼を得られ、その後の、保護者への連絡等がしやすくなったことにつながった。

調査によって児童の実態や変容を把握できたり、それを基に指導や学級経営の工夫を講じることができたりすると判断し、定期的にアンケート調査を行うこととした。アンケート方法として、仙台市標準学力状況調査のアンケート項目を抜粋したものをを用いることにした。また、状況に応じ、記述式も併用することとした。

② p4cの実践

今年度の6月に、ある児童から同学級について「あの子の名前を知らない。」という発言があったことから、学級に対する児童の認識を調査(R)することとした。「学級について心配なこと」を聞いたところ、「学級に、まだ知らない子がいる。」、「友達がなかなかできない。」等、交友関係についての不安が多いことが分かった。所属校のような大規模校では、毎年度の学級編成により、それまで仲の良かった友達と違う学級になったり今まで同学級になったことのない児童と一緒にあったりする割合が高い。そのことに対し不安感を抱いている児童が多いという実態が明らかとなった。

このことを踏まえ、児童にとって、学級が安全・安心な

場となるよう、p4c(子供のための哲学、話し合いの手法の一つ)を行った。p4cにおける「セーフティ」を、日常生活でも意識していくことが、学級での安全・安心につながると考えたからである。p4cの実施前には、到達目標を明確にすることで、活動の効果が高まると予想し、この活動を通し、学級の皆の名前を覚えてほしいことや友達を増やしてほしいという担任の意図や理想(ビジョン)を伝えた。p4c実施後、児童からは、「p4cのときのように、相手の話をちゃんと聞こうすることが大切だ。」や「p4cのセーフティを、普段の学校生活でも守るようになるとよいと思う。」という声が聞かれた。また、「普段会話をしない子の考えを聞くことができて楽しかった。今度その子と話してみようと思った。」等の振り返りが聞かれた。

③交換授業を取り入れた学年経営

感染症対応により、7月いっぱい、担当する学級に学年の教員が補欠として入り、それぞれの担任が一つの教科を受け持ち、授業を進めるという状況が続いた。それにより、教員間で、他学級の児童の実態把握ができ、学年会等での児童の話題がより具体的に共通理解できるようになった。また、担当教科を絞ることで、教材研究や授業での実践を洗練することができたり、教科・生徒指導について相談し合う機会が増えたりといった状況が生まれた。しかし、それと同時に、4年生児童全体が、担任以外の教員との学習に不慣れで、落ち着いて学習に取り組んだり学校生活を送ったりすることが、この時点ではまだ難しいという実態も見えた。

これを踏まえ、一部教科担任制を1月から試験的に運用することとし、その前段階として、学年担当教員が、空き時間に各学級を巡回し、T2 や児童支援を行うといった取り組みを始めることとした。そのために、算数少数担当教員を算数専科とし、学年の学級担任に1日1単位時間の空き時間を作っている。11月中旬から冬休み前までの約1ヵ月間実施した結果、児童からは、「他の先生との授業も楽しい。」「他の先生のこともよく分かってきた。」等の前向きな発言が聞かれるようになり、7月に比べ、他の教員との学習であっても、落ち着いて取り組むことができるようになってきた様子が見えてくる。これは、来年度以降の高学年、中学校での学びにもつながるものであると言える。

また、7月の一時的な教科担任、11月からの算数専

科の導入を通し、学年の教員間の同僚性が非常に高まったことがうかがえる。朝の勤務前や休み時間を利用して、こまめに情報交換をしたり、児童の様子を報告し合ったりする時間が増え、学年担当教員全員で、学年の児童を見る、対応するという意識が高まり、教員間の協力体制が、より強固になった。また、教科指導について、どの部分でどの児童が躓きやすいか、教具の準備や扱い方を共通にして、学年で一貫した指導ができるようにする等、話し合う機会が増えた。お互いの学級を見合うことで、「話を聞いているだけでは分からない、それぞれの学級の様子がよく分かるようになった。」や「他の学級を見ることで、自分の学級に必要なことが見えてくる。」「他の先生の教科指導を見て自身の指導を改めることができる。」といった声が聞かれ、学年主任のリーダーシップの下、教員間に自然と学び合い、教え合い、支え合いの雰囲気醸成されたと言える。

2)RVとしてのアンケート実施

4月に行われた、仙台市標準学力状況調査の生活状況調査から19項目を抜粋し、6月と11月にもアンケートを行った。自己指導能力の育成を意図しつつ、質問項目は、質問に示されている規範的な姿を児童と共有し内面化することを意図として選んだ。併せて、結果も共有するようにした。アンケートから、以下の結果が得られた。

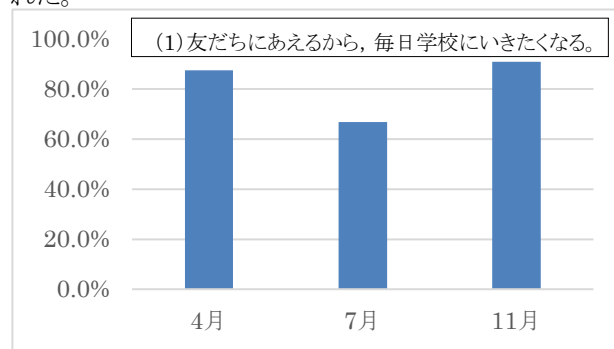


図1 仙台市生活状況調査の結果の比較

6月の、p4cの実践の直前に行ったアンケートで、「友達に会えるから学校に行きたくなる」に「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答していた9名のうち8名が、11月のアンケートでは「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、その8名を含めた30名が同様に回答した(児童数33名)。(図1)合わせて、「学校では、仲の良い友達がいる。」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童が97%だった。12月に行った記述式

アンケートでは、「4月から見て、学級はよくなったか。」という質問に対し、「よくなった」「少しよくなった」と回答した児童が30名中25名だった。5名は「あまり思わない」、「思わない」と答えたが、理由として「あまりけんかが減っていない。」や「先生に同じことで怒られているから。」等を挙げている。（1名無記入，2名欠席）

アンケートの児童の記述内容（一部抜粋）

- ・思います。みんながみんなげんきで、自分がいいこともいえるクラス。ほかのともだちがだめなことをしていたら、だめだよとちゅういできているいいクラス。
- ・思う。なぜなら、みんな仲良くできているから。
- ・友だちがふえて遊びやすくなった。友だちと協力して色々なことができるようになったところ。
- ・思います。けんかがへったと思います。
- ・思う。きりかえがすばやくなったから。
- ・ケンカはまだあるけれど、みんながいっしょにそとであそんだり、しゅうちゅうしてべんきょうをやったりして前よりはよくなったと思います。

図2「クラスがよくなったと思う理由」

また、11月のアンケートで「他の人の役に立つ人になりたいと思う」に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童は90%だったが、12月の記述式アンケートでは、児童全員が「そう思う」と答えた。

アンケートの児童の記述内容（一部抜粋）

- ・友だちがたくさんつくれそうだしいいことしたなと思うからです。
- ・しんらいできる人に、なりたいから。
- ・1年生から4年生まで助けてくれた人におんがえしをしたいなにもできないかもしれないけどもしどこかであつたらんがえしをしたい
- ・人のいのちなどを助けることによって、かんしゃされたり、しょうらいのゆめが広がると思うからです。
- ・思います。なぜかという、みんなと助けあって、みんなときょう力して、楽しい人生をあゆんでいきたいからです。

図3「他の人の役に立つ人になりたいと思う」理由

記述の内容から、児童が学級の現状や変化を前向きに捉えていること、交友関係が広がり、人間関係が安定してきたことがうかがえる。また、他者との関わりに価値を見出している児童が多くいることが分かった。すなわち、質問を通して内在化した規範的な姿に、児童が自律的に近づこうとした姿がうかがえたとと言える。これらのことから、児童の学級に対する不安感が軽減され、学級に安全・安心の風土が醸成されてきていると言える。

5. 考察

実践により、児童の交友関係の広がりや人間性の深まりが見える等、学級に安全・安心な風土が醸成されてきたり、児童に直接的・間接的に規範的な姿を提示したりしたことで、児童に自己指導能力を育成する土台が培われてきたと言える。同時に、児童同士の人間関係の安定が学級でのトラブルの減少・軽減につながっていることから、学年・学級経営の工夫といった常態的・先行的な生徒指導が、生徒指導上の課題の未然防止につながると言える。

RVPDCA サイクル、特にRとVを意識したことで児童の実態把握と解決課題や成長目標の見定め、他の教員との協力体制の確立につながったと言える。特に、所属校のような大規模校の利点として、豊富な人材が挙げられる。多くの目で児童を見ることができることや、それにより、学校における諸問題に即時対応できる体制が整いやすいこと、教員同士の報告・連絡・相談のし易いことは、日々の指導においてもRVPDCAサイクルを運用する上でも大きな強みである。様々な教員がいることで、個別の配慮を要する児童への対応の手立てが豊富であり、安心して対応ができる支えとなっている。

学年での取り組みを通し、学年の教員間の同僚性が向上したことは、校務を遂行する上で精神的な支えであり、心的余裕を生み出すものであった。これは、多忙化を減少させる働き方改革の具体的な施策となるものではないが、日々の業務の負担感や多忙感、不安感を取り除くものであり、教師という仕事に対する使命感や自己研鑽に対する意欲を高めるものであった。本校校長の言葉を借りるのであれば、「働き甲斐」改革が為されたのである。我々教員がチームとして同僚性を高め、教育課題に真摯に取り組むことが、児童の成長と教師の質的向上を促すものなのである。それは、学年という単位を基に積み上げられていくものであると考える。

引用・参考文献

- 1) ロバート・K・グリーンリーフ：サーバントであれ 奉仕して導く、リーダーの生き方、英治出版、2016年
- 2) 文部科学省：生徒指導提要
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008_00001.htm（令和5年1月22日最終確認）

大規模校における学年経営の在り方

～ RVPDCA による生徒指導問題の未然防止～

大友 啓之(i21049)

要旨 近年、教員の新規採用者数が増加し、その育成の充実が重要課題となっている。一方で、教員の多忙化が大きく問題視されるようになり、児童数1100名を超える所属校においては、生徒指導案件の多さが、教職員の負担感や多忙感に拍車をかけており、生徒指導上の課題の減少や発生の未然防止が求められる。その実現のため、児童の自己指導能力の育成、その素地となる人間性を養うことを目的として、カウンセリングマインドを踏まえたアセスメント、規範的な姿の共有化を意識したアンケート、同学年の教員による授業・指導支援を、RVPDCA サイクルの中で展開した。これらの実践を通し、学級に安心・安全な風土が醸成されるとともに児童に変容が見られ、生徒指導上の課題が軽減した。また、同学年の教員同士の同僚性や協働の深まりも見られた。同学年の教員のチームワークの下、児童の自己指導能力の育成を意識した生徒指導を実践することは、児童の成長や生徒指導上の課題の未然防止に有効であると言える。

キーワード: 自己指導能力, RVPDCA サイクル, 安心・安全な風土の醸成, アセスメント, p4c

ユニット指導教員

◎本図 愛実, 信太 昭伸, 佐々木 孝徳